

チーム Time 30号

特集

足のトラブル



◎発行年月
2023年■月
◎発行
帝京大学医学部附属病院
総務課広報企画係
◎編集・制作
ビーデザイン

T-me

T-me「チーム」は、
帝京大学医学部附属病院と
地域の皆さまをつなぐ院内誌です。
T:Teikyo = 帝京大学医学部附属病院の頭文字
me:Medical = 地域の皆さまのための医療

また、「チーム」には
医師、看護師、薬剤師、栄養士、
その他病院全てのスタッフが連携して行う
チーム医療の意味も込められています。

printed in japan
本紙掲載の写真・記事の無断転用を禁じます。
©2023 帝京大学医学部附属病院

目次

特集

足のトラブル

「足のトラブル」いくつか知っていますか？

痛みや違和感、放置しないで！**動脈性疾患**

循環器内科 川嶋 秀幸先生
内分泌代謝・糖尿病内科 内野 卓也先生
腎臓内科 奈倉 倫人先生
形成外科 福場 美千子先生
看護師 松田 麻耶さん
感染症内科 北沢 貴利先生
皮膚科 田中 隆光先生
整形外科 佐藤 健二先生
皮膚科 上松 藍先生

06

ワンチームで患者さんを支える
フットケアチーム 座談会

14

チーム医療

造血細胞移植コーディネーター

林美香さん

18

Topics & News

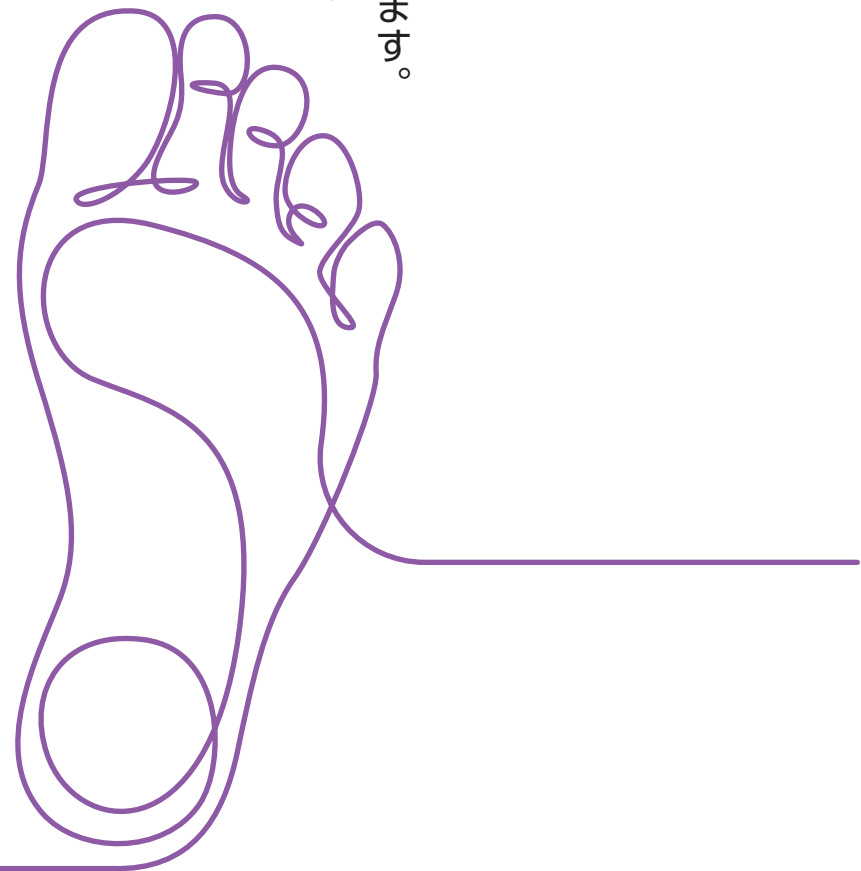
帝京大学医学部附属病院からのお知らせ

19

特集

足のトラブル

私たちは「足」によって歩行を支えられています。
足は爪や皮膚の疾患、感染症、さらに糖尿病、
循環器の病気や腎臓病といった
さまざまな疾患と密接な関連があります。
小さな傷の治りが悪かったり、
皮膚に変色が見られる場合など、
些細な症状も軽視せず、適切な対策を行いましょ



クロスワードパズル

二重ワクの中に入る文字をアルファベット順につなげると、
医療に関するある単語になります。

1	2	3	
A			
4	B	5	
6			7
		8	
9			

(タテのカギ)

- 1 スペインの伝統的な芸能芸術。
- 2 セリフの前後につきます。カギ〇〇〇。
- 3 カモメを英語でいうと。
- 5 栗のお菓子はおせちに欠かせません。
- 7 板橋区に隣接している埼玉県各市。

(ヨコのカギ)

- 1 卵がかえること。
- 3 「〇〇より量」では駄目なことも。
- 4 幸運を英語でいうと。
- 6 中国からベトナムまで6カ国を流れる大河。
- 8 アジアとヨーロッパにまたがる共和国。
- 9 硬貨のこと。

A	B	C
---	---	---

(答えは P.19)

「足のトラブル」いくつ知っていますか？

足は『第二の心臓』とも称され、その重要性は計り知れません。足には、皮膚や爪のトラブル、感染症など、さまざまな疾患が発生します。これらの原因は多岐にわたるため、複数の専門分野が連携しなければならぬことも多いのです。帝京大学医学部附属病院では、このような多様な疾患に対応するため、チーム医療を実践し、各科との連携を深めながら治療を行なっています。



動脈性疾患

糖尿病や慢性腎臓病（CKD）による合併症、下肢閉塞性動脈硬化症、難治性潰瘍などの疾患が含まれます。これらの疾患は進行すると、壊疽（えそ）や潰瘍を引き起こす可能性があります。特に、小さな傷が治りにくくなったり、足に痺れや痛みを感じる方は、病状が進行している可能性があるため、早めの医療機関の受診をおすすめします。



P.6

感染症

P.10

感染症は、細菌やウイルスが皮膚から侵入し繁殖することで発症するもので、連鎖球菌や蜂窩織炎などがその例です。基礎疾患を持つ人は、感染症に罹患しやすくなる場合があります。また、切り傷などの傷口からも感染することがあるため、全ての年齢層で感染症に対する注意が必要です。



【関連する科】 感染症内科、皮膚科、
整形外科など

静脈性疾患

P.12

「下肢静脈瘤」が主な疾患です。足の血管が異常に膨らむことでコブのような隆起が現れるのが特徴的です。この瘤は、血管の太さに基づき4つのカテゴリに分けられます。特に、立ち作業が多い人は下肢静脈瘤のリスクが高まるとされています。

下肢静脈瘤のタイプ

伏在型 ≥4mm	側枝型 3-4mm	網目状 1-2mm	くもの巣状 ≥1mm
外科的治療	硬化療法・弾性ストッキング		

【関連する科】 循環器内科、
静脈瘤センターなど

爪

P.13

巻き爪や陥入爪が主な疾患です。抗がん剤の治療を受けている患者さんは、爪のトラブルが発生しやすいとされています。爪の疾患は、一度治療しても再発しやすい性質があります。そのため、痛みを無視することなく、早期の治療が重要です。

【関連する科】

循環器内科、
内分泌代謝・糖尿病内科、
腎臓内科、形成外科、
整形外科、皮膚科など



巻き爪



かんじゅうそう
陥入爪

【関連する科】 皮膚科(爪外来) など

痛みや違和感、放置しないで！動脈性疾患

【循環器内科】

下肢閉塞性動脈硬化症は男性に多い？
歩行時に違和感を感じたら早めの受診を

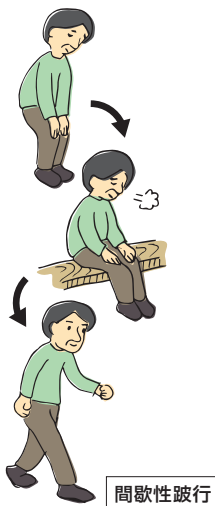
「下肢閉塞性動脈硬化症は、足の血管が動脈硬化によって狭くなったり、詰まったりする疾患です。」

「この病気は男性に多く見られ、患者の約8割が男性であると言われています。主な原因としては、喫煙や糖尿病、高血圧、高コレステロール血症などが挙げられます。」

——特徴的な症状があれば教えてください。

「初期段階では間歇性跛行^{かんけつせいはこう}という、足の痛みで歩けなくなる症状があらわれます。この痛みは特にふくらはぎやももの片側に感じられ、少し休むと和らぐため、症状を軽視してしまう人もいます。しかし、放置すると歩ける距離が徐々に短くなり、休んでいても痛みが強くなるようになり、外見からは症状の進行を確認するのは難しいのですが、早期に発見すればリハビリを用いた治療が可能です。症状が進行すると、脚部への血流が悪化し、小さな傷や火傷が

治りにくくなります。」



——どのように治療するのでしょうか？

「循環器内科での主な治療法はカテーテル治療です。この治療は血流の改善が早く、多くの患者さんが高い満足度を感じています。治療は早ければ約30分で完了し、翌日には「痛みが消えた」と元気に退院されるケースも多いので、私たちもやりがいを感じています。」

——私たちが日頃から気をつけられることはありますか？

「まず、この疾患は早期発見と治療が極めて重要であることを強調させていただきます。早期に症状を把握し、リハビリや他の治療と組



川嶋 秀幸先生 循環器内科 助教

2012年4月 帝京大学医学部附属病院 循環器内科 入局
2016年4月 帝京大学医学部附属病院 循環器内科 助手
2019年4月 Researcher in Cardiology, Rotterdam, Netherland
2020年2月 Research Assistant in CORIB Core Lab, National University of Galway, Ireland, Galway, Ireland
2021年8月 帝京大学医学部附属病院 循環器内科 助教

み合わせれば症状の改善が期待できます。糖尿病や高血圧など既に持病がある方は、その治療を優先した上でカテーテル治療を受けることをおすすめしています。せっかくカテーテル治療で血流が改善されても、日常生活が整っていないければ再発するリスクもあるからです。また、タバコは下肢閉塞性動脈硬化症の要因でもあるので、治療後も控えるよう助言してましますね。」

——今後の目標を教えてください。

「チーム全体でカテーテル治療の標準化を進めていきたいと考えています。さらに、勉強会などを通じて、他の医療関係者や一般の方々にもこの疾患についての理解を深めてもらいたいです。」

【内分泌代謝・糖尿病内科】

国民の6人に1人が強く疑われる糖尿病
糖尿病患者に多い足トラブルとは？

末梢神経障害とは、糖尿病が悪化した際に引き起こされる疾患です。

「糖尿病を長く患う人は、末梢神経障害という合併症を起こすリスクがあります。初期段階では、手や足のしびれが現れますが、症状が進行すると末端の感覚が失われてしまい、靴ずれや傷などがあっても気づかないことが多くなります。実際に、糖尿病患者さんの足のトラブルの半数近くは、末梢神経障害が原因であるとのデータもあります。」

——糖尿病患者さんが、日頃から気を付けることはありますか？

「手と違い足はじっくり確認することが少ないので、定期的に足の状態を確認することが大切です。赤みや腫れ、傷がないかなど、簡単な確認をするだけでも予防につながります。末梢神経障害が進行していると、痛みを感じることがなくなるため、確認せずに放置していると、状態が悪化してしまう可能性が高まります。」



——糖尿病の自覚がない方でも、末梢神経障害を起こすことはありますか？

「糖尿病は自覚症状が出にくい病気です、症状が現れる頃にはすでに血糖値が非常に高い場合が多いです。空腹時の血糖値は100mg/dl以下が一般的なのですが、250mg/dl以上になつてから、頻尿、喉の渇きといった症状が現れるのです。そのため、糖尿病の早期発見のためにも、定期的な健康診断と血液検査が必要です。また、生活習慣の改善にも取り組んでいただきたいです。」



内野 卓也先生 内分泌代謝・糖尿病内科 助教

2012年 帝京大学医学部卒業
2018年 帝京大学医学部内分泌代謝・糖尿病内科 助手
2019年 帝京大学医学部内分泌代謝・糖尿病内科 助教

——治療についても教えてください。

「糖尿病は生活に密着した病気なので、普段から気をつけていくことが大切です。私たちは、患者さんの生活習慣の改善をサポートしながら、最新の治療技術を取り入れてより良い治療を提供していきたいと考えています。また、足のトラブルへの対応については、他科との連携が不可欠です。これからも協力し合いながら、最善の治療を行なっていききたいと思えます。」

——読者の方へメッセージをお願いします。

「糖尿病の予防はもちろん、糖尿病の方は足のトラブルのリスクがあることも認識して、適切なケアを心掛けていただきたいと思います。」

【腎臓内科】

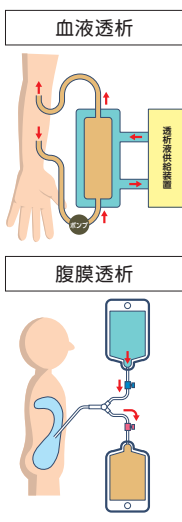
慢性腎臓病（CKD）で動脈硬化も
透析治療はフットケアも大切に

透析治療をしている方の中には、足のしびれや痛みを訴える方もいるそうです。

「成人の8人に1人が慢性腎臓病（CKD）と言われています。腎機能が通常の15%以下にまで低下すると、透析や腎移植が必要になることが多いです。透析治療を始める際、私たちは患者さんに、もし足に異常を感じたらすぐに知らせるよう強く勧めています。腎臓は血液をろ過して尿を作成する臓器で、多くの血液が流れているため血管の疾患に弱いとも言えます。腎不全の状態は動脈硬化のリスクを高める一方、動脈硬化が存在すると腎不全になりやすくなるという事です。

足のトラブルを早期にキャッチすることで、CKD治療と合わせて適切なフットケアを提供できるのです。さらに、CKDの患者さんは心血管疾患のリスクが一般の方と比べて2〜3倍高く、透析患者の場合はなんと30倍も高いとされています。当院では、腎臓の専門だけでなく、循環器内科、形成外科、心臓血管外科、糖

尿病内科などとの連携をとりながら、チーム医療の形で最良の治療を提供しています」



「治療を進めていく中で、気をつけていることを教えてください」

「実は、透析治療を受けている患者さんは足のトラブルを訴えることが少ないのです。多くの透析患者さんは週に3回クリニックに通っており、他の診療やフットケアを受けることをためらうのでしょうか。しかし、放っておくことで足の一部が壊死してしまうこともあります。私たちは積極的に患者さんの足の状態をチェックし、必要な場合は専門の先生に紹介するように努めています。

患者さんにもご理解いただいた上で、フットケアと合わせた透析治療をご提案しています」
「患者さんとの関わりも強いんですね。」



奈倉 倫人先生 腎臓内科 臨床助手

2009年 帝京大学医学部大学院 腎臓研究室入局
2013年 堀ノ内病院
2015年 帝京大学医学部付属病院腎臓内科 臨床助手

「慢性腎臓病の患者さんとの関係は非常に深いですが、透析治療を受けることで生活は続けられますが、臓器の障害を完全に回復させることは難しいのが現実です。私たちは患者さんとの信頼関係を大切にし、その方とご家族のサポートを継続的に行っていくことが使命だと感じています」

「今後の目標を教えてください。」

「個人的な目標としては、日々の診療で動脈硬化性疾患のスクリーニング体制を更に強化したいと考えています。」

チーム全体の目標は、腎臓内科とフットケアチームとの連携を強化し、透析患者さんが安心してフットケアを受けられる環境を整えることです。また、情報管理の向上も重要だと感じています」

【形成外科】

なかなか傷が治らない…
難治性潰瘍は早期発見・早期治療が大切

「難治性潰瘍」には、主に2つの原因があります。ひとつは動脈の流れが悪化して生じる「虚血性潰瘍」、もうひとつは足に神経障害が発生し、傷を放置することで生じる「糖尿病性潰瘍」です。

「潰瘍」とは、皮膚が深く傷ついた状態を指します。潰瘍が治りにくい、あるいは拡大してしまう場合、それを「難治性潰瘍」と呼びます。定期的に病院に通っていない方は、潰瘍を早期に見るのが難しい場合があるので1週間以上傷が治らない場合は、早めに受診していただきたいです」

「治療法についても教えてください。」

「軟膏の塗布や、必要に応じて植皮術などの手術を実施して潰瘍の治療を進めます。最良の治療が切断と判断した場合はやむを得ず足の



福場 美千子先生 形成外科 助教

2005年 宮崎大学医学部卒業
2013年 帝京大学医学部形成外科助教

切断を行います。切断にならないよう早期の治療を行うことが大切です。

当院では「多血小板血漿（PRP）」を用いた難治性皮膚潰瘍治療も開始しました」

「日頃からできる予防法を教えてください。」

「定期的に足をチェックし、清潔に保つことが基本です。また、爪を過度に短く切らないよう注意が必要です。禁煙も潰瘍予防には非常に有効ですね」

「フットケア外来」

患者さんがリラックスできる空間を
足のセルフケアでQOLを向上させたい

帝京大学医学部附属病院には、糖尿病があり、なおかつハイリスク要因のある患者さんが対象の「フットケア外来」が設けられています。

「フットケア外来では神経障害のチェックや日常生活での足のセルフケア方法をアドバイスしています。具体的には、正しい爪の切り方や足の保湿ケアなど、日常生活での疑問や悩みを解決するためのアドバイスや相談が可能です」

「お仕事をする上で、普段から心がけていることを教えてください。」

「患者さんの足を自分の足のよう大切に思っただけでケアすることで、患者さんの足を細かくチェックし、洗浄や処置を行っています。どの患者さんにも心を込めて接し、足の大切さを日常生活でも意識してもらえよう、セルフケア方法をお伝えしながら足への関心

を持ってもらいたいと思っています」

「今後の目標を教えてください。」
「より多くの患者さんがフットケア外来を利用できるようにすることを考えています。足の問題により生活の質が低下してしまわないよう、当外来を通じて患者さんの心と足、両方が健康になれるような場所を提供していきたいと思っています」



松田 麻耶さん フットケア外来 看護師

2001年 神戸市看護大学短期大学部卒業
2005年 帝京大学医学部附属病院入職
2015年 日本糖尿病療養指導士取得
2016年 糖尿病看護認定看護師取得

日々気をつけておきたい感染症

【感染症内科】

身近に潜む感染症：他科との連携で適切な治療を

若い世代で基礎疾患がない人でも、レンサ球菌やブドウ球菌による蜂窩織炎を発症するリスクがあります。特に、糖尿病などの基礎疾患を持つ人々は、感染症のリスクが高まります。

「感染症には誰もが感染する可能性があり、年齢や性別を問いません。感染を引き起こす細菌はどこにでも存在するため、傷を放置して細菌感染を招くことはよくあることです。糖尿病などの基礎疾患を持つ人は、足の血流が悪化していたり、神経障害のために傷に気づかないことがあります」

——どのように予防したらいいのでしょうか？

「蜂窩織炎の予防としては、疾患が比較的早く進行するため、異常を感じたらすぐに写真を撮り、記録しておくことが有効です。ブドウ球菌が傷口から増えていくので、傷口を常に清潔に保つことが大切です。何か異常や気になる点があれば、早めに受診していただけたらと思います」

——日頃から心がけていることがあれば教えてください。

「患者さんの足のトラブルを診る場合、他の診療科との連携が大切です。例えば、膿んだ部分の処置は外科の先生が行いますし、糖尿病の患者さんの場合、糖尿病の治療が優先されます。私たちの最大の目標は感染症の治療ですが、他科の先生と患者さんとの関係を円滑に保つことも大切にしています」

——やりがいを感じることはなんでしょうか？

「感染症は急性の疾患でもあります。私たちが治療をすることで、患者さんが元の健康な状態に戻れるとき、『先生に助けてもらった』などと言っていたけるとやりがいを感じられますね」

【皮膚科】

足が赤く腫れてきた？
免疫の低下から感染することも

小さなタコや水虫が悪化すると、その部位から細菌が侵入し、皮膚の感染症を起こすことがよくあります。特に免疫力が低下している高齢者は「敗血症」にも注意が必要です。

——早期発見できるサインはありますか？

「皮膚の感染症は、見た目よりも深刻な場合があるので軽く考えずにはいけません。感染症には、発赤（赤くなる）、熱感（熱くなる）、腫脹（腫れる）、疼痛（痛む）と、4つの徴候があります。これを把握しておくことで、自身の状態をチェックする際の参考にできます」

——治療法についても教えてください。

「まず、他の合併症の有無を確認し、さまざまな専門科と連携して治療を進めていきます。特に、敗血症という状態は菌が血液に侵



田中 隆光先生 皮膚科 講師

2006年 帝京大学医学部卒業
2006年 帝京大学医学部附属病院 虎の門病院
2010年 帝京大学医学部附属病院 日本皮膚科学会 指導医・専門医
2012年 帝京大学医学部附属病院 日本皮膚科学会 指導医・専門医
日本静脈学会（血管内レーザー焼灼術）指導医

入し、命に関わることもあるので注意が必要です。また、後遺症を残さずに治療することも大切にしています。長く放置された傷は腐敗していることもあるため、感染が拡大しないような治療を行い、形成外科や整形外科と連携をとりながら適切なケアを施していきます」

——今後の目標を教えてください。

「皮膚科は多くの人々にとって身近な疾患を扱う科です。これからも、どのような疾患であっても、しっかりとした診断と適切な治療を提供していきたいです」

【整形外科】

患者さんのためのチーム医療

足のスポーツ障害や変形による問題を専門とする整形外科では、感染症の治療にも取り組んでいます。「整形外科は、スポーツによるケガや変形、痛風などによる足の問題、高齢者であれば外反母趾などの足の変形で歩行が難しい方を対象にすることが多い科です。感染症については、糖尿病や閉塞性動脈硬化症に起因する足の壊死や循環障害、化膿性足関節炎や骨髄炎、化膿性腱鞘炎などを対応しています。足の問題を持つ患者さんが他の疾患も併発していることもあるため、連続した治療を心掛けて対応しています」

——院内ではどのような協力体制を敷いていますか？

「主に形成外科、皮膚科の先生と関わる人が多いです。困ったことがあれば、すぐ電話でコミュニケーションが取れることはとても助かっています。こうした連携

が患者さんのための最善の治療に繋がっていると思います」

——読者の方にメッセージをお願いします。

「自分で判断して感染症ではないと決めつけず、気になる症状があれば早めに受診していただき、適切な治療が可能です。何か気になることがあれば、遠慮せずに相談してください」



佐藤 健二先生 整形外科 助教

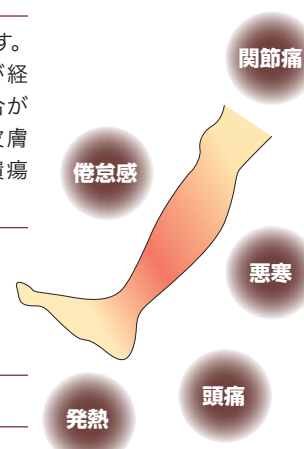
2007年 北海道大学医学部卒業
2014年 帝京大学大学院修了
2017年 Albert Einstein College of Medicine, 研究員
2018年 帝京大学医学部附属病院整形外科 助手
2021年 国立がん研究センター中央病院 骨軟部腫瘍科
2022年 帝京大学医学部附属病院整形外科 助教

ほうかしきえん 蜂窩織炎

症 状 広範囲に赤く腫れ、高熱が出ます。頭痛や悪寒などを伴い、時間が経つと、硬いしこりが発生する場合があります。症状が進行すると、皮膚が破れて膿が流れ出て、深い潰瘍ができることもあります。

原 因 ・外傷、擦過傷からの二次感染
・接触皮膚炎の放置や虫刺され
・黄色ブドウ球菌
・化膿性レンサ球菌

発生部位 ・顔 ・四肢（特に下肢）



北沢 貴利先生 感染症内科 病院教授

1997年 東京大学医学部医学科卒業
2005年 東京大学大学院医学系研究科修了
2008年 東京大学医学部附属病院感染制御部 助教
2010年 帝京大学医学部内科学講座 講師
2017年 帝京大学医学部内科学講座 准教授
2018年 帝京大学医学部内科学講座 病院教授

立ち仕事が多い、むくむ… 女性に多い静脈性疾患とは？

下肢静脈瘤は足の血管が膨らんでこぶのようになる症状で、国内には推定で1000万人以上が患っているとされる身近な疾患です。

「下肢静脈瘤は、女性や妊婦さんに多く、妊婦の中では2人に1人がこの症状を経験するとされています。立ち仕事が多い人や、お寿司屋さんのような職種の方もかかりやすいです。症状としては、足の筋肉のポンプ作用の低下により、むくみ、だるさ、倦怠感、朝のこむら返り（足がつる）などがあります。しかし、これらの症状だけで下肢静脈瘤と診断するのは難しく、心臓や腎臓など他の臓器による類似の症状も考えられるため、医師による視診や複数の検査が必要となります。」

—— 予防することはできますか？

「血液の流れを良くするために十分な水分を摂取し、バランスの良い食事を摂ること、適度な運動をし、長時間の立ち続けや同じ姿勢を避ける

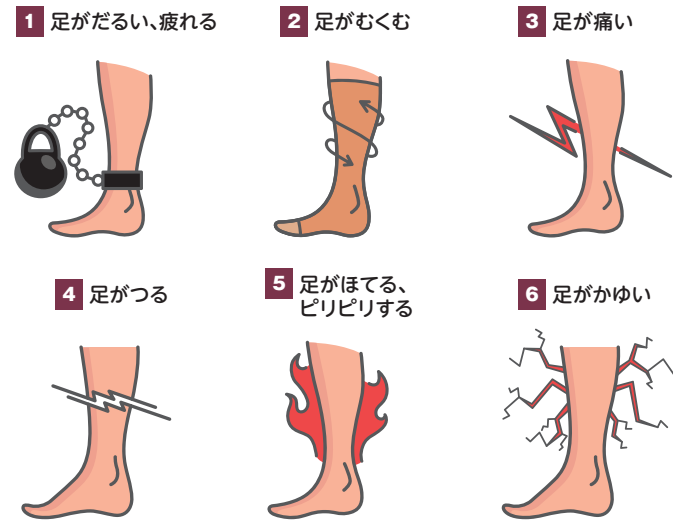
爪に関するトラブル 1日1回足の爪を見る習慣でトラブルを予防

巻き爪や陥入爪など爪に関するトラブルを扱うのが皮膚科 爪外来です。

「陥入爪は、爪が皮膚に刺さる症状で、原因は巻き爪、切りすぎ、または生まれつきの形状が挙げられます。痛みを伴うことが多く、その影の響で正常に歩行が困難になることもあります。特に、ヒールを頻繁に履く女性には多いトラブルとされています。」

—— どのような治療法を行なっていますか？

「患者さんの症状に合わせた処置が行われる中で、ガター法という爪と皮膚の間にチューブを挟む治療を積極的に取り入れています。これは痛みの軽減に効果的で、多くの患者さんが「今すぐ痛みを取りたい」と訴えるため選ばれることが多いです。他にも自費での治療としてVHOや巻き爪マイスターといった金属のワイヤーでの矯正方法も行っています。巻き爪が数年で再発するケースも多いため、その対策としてのニーズがありますね。」



ことが重要です。下肢静脈瘤の原因はまだ完全には解明されていませんが、基本的には良性的の疾患です。安全に治療することを心がけてい

—— 日頃からできる予防法はありますか？

「一番巻き爪になりやすい指は親指です。日頃から足の親指に力を入れて歩くようにすると親指に筋力がつくので予防につながります。足の爪は、伸びるまでに1年かかると言われています。日常の歩き方や生活習慣の見直しで、爪の伸び方にも変化が期待できますよ。」

—— 爪切りのポイントを教えてください。

「爪の先端を四角く切ることが理想の切り方です。爪の両角は残し、やすりなどで少し丸めておきましょう。爪の長さについても、伸ばしすぎや短すぎは避けるべきです。イラストを参考に正しく切るようにしましょう。」

また日頃から爪を見る習慣をつけておくこともおすすめです。例えば、お風呂に入ってから洗う時、足の指も一本一本見ながら洗っていたら、爪の異常にも気づくことができます。爪が伸びすぎているか、傷がないか、水虫ができていないか、凹凸がないかなどをチェックして



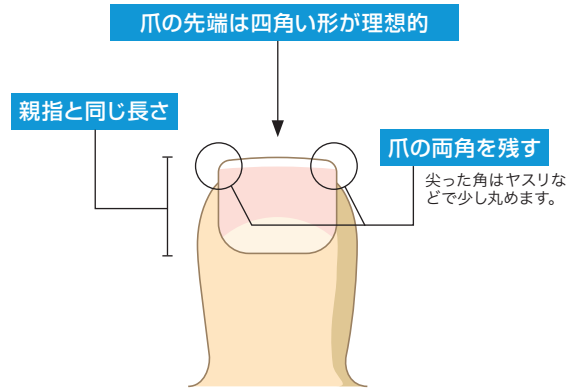
田中 隆光先生 皮膚科 講師

2006年 帝京大学医学部卒業
2006年 帝京大学医学部附属病院 虎の門病院
2010年 虎の門病院
2012年 帝京大学医学部附属病院
日本皮膚科学会 指導医・専門医
日本静脈学会 (血管内レーザー焼灼術) 指導医

す。下肢静脈瘤と診断された場合、弾圧ストッキングによる圧迫療法である程度ラクに過ごすことができますが、毎日の継続が必要なので、それが難しい場合もあります。症状が進行すると潰瘍を起こすリスクがあり、その場合は手術が必要となることもあります。手術によって9割ほどは改善しますが、色素沈着などの見た目の問題が残ることもあるため、皮膚科的なアプローチでの見た目の改善も重要と考えています。」

—— 今後の目標を教えてください。

「静脈瘤には新しい治療法が出てきています。より安全で身体への負担が少ない治療を提供したいと考えています。」



上松 藍先生 皮膚科

| 2013年山梨大学卒業

—— ましょう。

—— これからの目標を教えてください。

「保険診療でできるガター法をもっと広げたいですね。どの皮膚科でもガター法で治療できるようにしていきたいなと思っています。ガター法は痛みの軽減に即効性があるため、施術後すぐに快適な日常生活が送れるというメリットがあります。」

爪のトラブルにお悩みの方は、皮膚科へお越しください。患者さんのご要望に合わせた治療をご提案します。」

ワンチームで患者さんを支える フットケアチーム座談会

普段は、それぞれの部署で活躍する医師や看護師。帝京大学医学部附属病院では「足のトラブル」を抱えた患者さんの症状にあわせて、チーム医療で対応しています。今回は、フットケアチームのみなさんがどのようにチーム医療を行っているのか、お話を伺いました。

いつでも気軽に相談できる フットケアチーム

——先生方が働いていくなかで「このチームで良かった」と感じたエピソードを教えてください。
感染症内科 北沢先生「私は、糖尿病や足の血管障害をもつ患者さんを担当しています。そのため、他科との連携は不可欠。普段担当している先生との協力がなくては、治療方針を提示することが難しいんです。帝京大学のフットケアチームは些細なことでも、気軽に相談できる環境です。信頼関係がある中で患者さんにあつたベストな治療を進めていけることは、ありがたいと感じています」

整形外科 佐藤先生「診療科間の垣根は本当に低く、相談しやすい環境ですよ。私は、困った時は電話をすることが多いのですが、どの先生もすぐに相談に乗ってくれるので助かっています」

形成外科 福場先生「佐藤先生と同じく、電話ですぐにコミュニケーションが取れることは本当に助かっています。緊急時など、すぐに対応を依頼できますし、対処方法を教えていただくことも多く、チームの良さを実感しています」

腎臓内科 奈倉先生「各科の当直体制がしっかりと機能していることは、患者さんだけでなく医師にとっても安心できる体制ですよ。緊急



の対応が必要な際でも早く患者さんに対応してくれます。この体制があるからこそ、私たち腎臓内科でも安心して透析患者さんや慢性腎不全の患者さんの通常診療を行えているんですよ」

チーム医療で幅広い疾患にも対応

——帝京大学医学部附属病院のチーム医療の強みを教えてください。
循環器内科 川嶋先生「循環器内科、心臓血管外科、形成外科をはじめ、さまざまな科が揃っているので、どのような足病変があつたとしても院内ですべて完結できることは、大きな強みだと感じています」

皮膚科 田中先生「ほとんどの疾患に対応できますからね。私たちは、その日どんな患者さんがやってくるかわかりません。以前、足の壊疽（組織が腐っている状態）の患者さんが外来で受診された際に、循環器内科に電話したところ、すぐに直接皮膚科の外来にまできてくれたことがあつて、とても頼もしく感じました」

速に対応できていると感じています」
——糖尿病患者さんに足のトラブルが見つかった場合、どのように治療を進めていくのでしょうか？

内分泌代謝・糖尿病内科 内野先生「糖尿病患者さんの約3割が末梢神経障害を発症すると言われています。小さな傷のうちに対応できればいいのですが、処置が遅れ壊疽状態になっていると切断を選択する場合もあります。糖尿病内科の患者さんにこうした足のトラブルが発生した場合、糖尿病の治療を続けながら、各科の先生と相談しながら優先順位をつけて治療を進めています」



形成外科 福場先生「すでに皮膚が深くえぐれた潰瘍になっていた場合、形成外科が対応します。私たちは、どうして潰瘍ができてしまったのか、その原因を確認する検査を行いながら、治療を進めていきます」

循環器内科 川嶋先生「検査結果で患者さんの足の血流がすでに悪化している状態だと、循環器内科や心臓血管外科で『血行再建』を実施します。その後、形成外科に治療をお願いしています。患者さんの治療状況については、フットケアカンファレンスでも共有しているので、患者さん一人ひとりに合わせた治療が可能なのです」



循環器内科 川嶋先生「これからも今以上に密な連携をとっていききたいと思っています。他の先生方がおっしゃっていたように、本当に垣根が低く相談しやすいチーム体制ですので、患者さんにとって最適な治療方法をご提案できるように、努力し続けていきたいです」

内分泌代謝・糖尿病内科 内野先生「垣根の低さはフットケアチームの誇れる部分だと思っています。糖尿病は、病気が進行しない限り自覚症状が乏しいのも事実です。また患者さんに主体的に取り組んでいただくことで改善できる病気でもあります。患者さんと共に治療していけるよう、これからも寄り添った医療を心がけていきたいです」



形成外科 福場先生「ちなみに患者さんの中には、ご自身が糖尿病だと知らずに『なかなか足の傷が治らない』と形成外科にやってくる方もいらっしゃいます。その場合は、糖尿病内科と連携し、内科的な治療を進めていきます」

——足が治ればいいということではなく、患者さんごとに合わせて治療をフットケアチーム全体で見守っているんですね。

皮膚科 田中先生「足のトラブルの原因は本当にはさまざまありますが、皮膚科に入院された方に既往歴を伺うと、糖尿病や心臓に疾患があるという方も多いです。その場合は、内科的な治療も同時に実施していきます。感染症の場合、敗血症のリスクもあるため怪我が治れば良いというわけではないんです」



腎臓内科 奈倉先生「フットケアチームに集まった先生方は、専門分野は違えど目指す場所は同じ同志です。専門医師やコメディカルが随時話し合いながら診療が進められることは患者さんにとっても最良の選択ができる方法でしょう。チーム医療を生かしながら、さらなる結束を深めて多くの患者さんをサポートできればと考えています」

形成外科 福場先生「帝京大学医学部附属病院の理念でもある『患者そして家族と共にあゆむ医療』。この思いが根底にあるからこそ、フットケアチームでもチーム医療が成り立っているのだと感じます。みんなで助け合いながら、患者さんを支えていきたいと考えています」

整形外科 佐藤先生「足にトラブルを抱えた患者さんには、内科的な疾患があるケースも多いですからね。感染症の場合、骨折などは異なり怪我した部分が良くなっても根本が解決したわけではありません。とくに糖尿病は再発リスクも高いですから、継続的にケアをして全身を良くしていくことが大切だと感じています」

お互いを信頼することで生まれるチーム力

——改めて読者の方へメッセージをお願いします。

皮膚科 田中先生「足のお医者さんとして、より迅速に対応できる体制を整えていきます。何か足のトラブルで気になることがあれば、気軽に受診ください」

感染症内科 北沢先生「ワンチームでチーム医療に取り組んでいます。今後は若い先生方にもこの領域に興味を持ってもらえるよう、診療科を超えた研修を実施していきたいと考えています。今よりも強固なチームになることが、患者さんの安心につながるからです」

整形外科 佐藤先生「新型コロナウイルスの影響もあり、顔を合わせる機会が減ってしまったのですが、今後は院内での勉強会やカンファレンスなどを通じて、顔のわかるチームづくりに取り組めるようにと考えています。One for allの精神で、患者さんにベストな治療をお届けできるよう努めていきたいです」



患者さんに寄り添う造血細胞移植コーディネーター

血液内科には、造血細胞移植コーディネーター*が在籍しています。

「当院の血液内科では、骨髄移植やさい帯血移植などの同種移植や自家移植をおこなっています。造血細胞移植コーディネーターは、移植を受ける患者さんだけでなく幹細胞提供者（ドナー）になれる方やご家族に対し、移植の意思決定支援や説明をおこないます。そして骨髄バンクやさい帯血バンク等の移植関連機関との窓口となり、患者さんに合った移植環境を整えながら中立的な立場でサポートする役割を担っています。医療行為はおこなわず、患者さんやドナーさん、ご家族の第一の相談窓口にもなっています」

「日頃から心がけていることはありますか？」
「以前は当院の血液内科で看護師をしており、移植をおこなう患者さんにもっと行き届いたサポートをしたいと常日頃から考えていました。血液疾患の患者さんはご自身で治療効果を実感しにくい場合が多く、治療中も孤独を感じやすいため、お話を伺いながら心のサポートや情報提供で闘病意欲を維持して頂けるように努めています。」

そして、移植は多職種によるチーム医療で成り立っているため、積極的に情報交換やカン

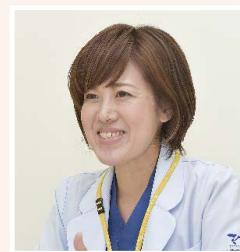
ファレンスをおこなない、患者さんを取り巻く移植環境を常に調整しています」

「患者さんとの関わりで、印象に残っているエピソードはありますか？」

「血液疾患は自覚症状がないにも関わらず、健診で指摘され再検査をおこなって突然診断されることもあります。その診断に、驚き涙される方や、納得できずに怒りを感じる方も多くいらっしゃいますが、治療に専念した結果「帝京で治療を受けられて良かった」「スタッフの皆さんが心の支えになった」とありがたなお言葉をいただき、心から嬉しく思いました。患者さん一人一人に寄り添うことの大切さを学ばせていただきました」

「今後の目標を教えてください。」

「希望としては、もう一人コーディネーターを増やして、もっと患者さんに寄り添える体制を構築したいですね。日々治療方法も進化しているので、患者さんに最適な治療をご提供できるようにチーム全体で取り組んでいきたいです。日本においては、まだまだ造血細胞移植コーディネーターという職種が浸透していないので、こんなお仕事もあるんだと知っていただくとうれしいです。」



林 美香さん

読者の方へメッセージをお願いします

血液内科ではさまざまな疾患を扱っています。スタッフ一丸となり患者さんを第一に考えてサポートさせていただきますので、気になること、困ったことがあれば、お気軽にご相談ください」

※日本造血・免疫細胞療法学会の定める造血細胞移植コーディネーターの定義は、「造血細胞移植が行われる過程の中で、ドナーの善意を生かしつつ、移植医療関係者や関連機関との円滑な調整を行うとともに、患者・ドナー及びそれぞれの家族の支援を行い、倫理性的担保、リスクマネージメントにも貢献する専門職」となっています。この定義に基づき、より心の通い合った移植環境を提供出来るように心掛けています。



MY FAVORITE

精神統一する時間が欲しいと、生花と着付けを3年ずつ習っていました。バタバタと慌ただしい日々の中で、心を落ち着かせる時間って大切ですね。子供の入学式など、イベント時には着物を着ています。

医療についての知識を深める動画サイト「帝京メディカル」

当院の医師が専門分野の疾患や治療方法について、詳しく解説する動画サイト「帝京メディカル」。病気の症状や予防法、検査や治療方法についてポイントを絞って解説している番組です。

「帝京メディカル」の各コンテンツは

帝京大学医学部附属病院のホームページ「05病院のご案内」→「帝京メディカル」

より閲覧できます。ぜひご覧ください。

Topics & News

帝京大学医学部附属病院からのお知らせ

帝京メディカル番組一覧

■ 血液腫瘍 血液内科 教授 田代 晴子 造血幹細胞移植コーディネーター 林 美香	■ うつ病 ～新しい考え方と予防改善方法～ メンタルヘルス科 主任教授 功刀 浩
■ 無痛分娩 産婦人科 西澤 美紀 麻酔科 長尾 瞳	■ 子宮の病気 ～女性にやさしい低侵襲手術～ 産婦人科 主任教授 長阪 一憲
■ ラジオ波焼灼術 消化器内科 准教授 浅岡 良成	■ 進化するロボット手術 ～最新鋭 Mako システムの導入～ 整形外科 教授 中川 匠 整形外科 准教授 松田 健太
■ 未破裂脳動脈瘤 脳神経外科 教授 庄島 正明	■ 新しい臓器手術 ～最新技術で高難度手術に挑む～ 外科 教授 三澤 健之
■ 内視鏡による脳神経手術 脳神経外科 主任教授 辛 正廣	■ がんゲノム医療 ～ひとりひとりに最適ながん治療を～ 腫瘍内科 病院教授 渡邊 清高

ボランティア募集のお知らせ

帝京大学医学部附属病院では、ボランティア活動をしていただける方または団体は随時募集しております。

【条件】

- ・資格や経験は問わず、心身ともに健康な方
- ・人を思いやる温かい心をお持ちの方
- ・病院で知り得た個人的な情報を他人に漏らさないことを守れる方

【活動内容】

- ・外来手続き 検査受付案内
- ・自動支払機案内
- ・患者交流スペース「帝京宿場町 陽だまり」での活動（手芸やポスター作りなど）
- ・患者向け冊子の整理
- ・各種催し（イベント）
- ・車いす介助
- ・その他

【活動日・活動時間】

- ・平日 9時から16時
 - ・土曜日 9時から12時
- 月に2～3回程度（1回2時間以上）継続して活動できる方を希望しますが、無理のない範囲でご相談の上お願いしております。



【お申込み・問い合わせ】

病院指定の「ボランティア申込書」がございました。下記にご連絡いただきお取り寄せいただけますようお願いいたします。「ボランティア申込書」に必要事項を記載し、病院1階⑤番・患者相談室にご持参または、ご郵送ください。後日、コーディネーターよりご連絡差し上げ面接を行います。活動が決まりましたら、健康診断書の提出が必要となります。

帝京大学医学部附属病院 患者相談室(病院1階 15番窓口)
〒173-8606 東京都板橋区加賀2-11-1
電話:03-3964-1211(代表)

P.2 クロスワードの答え

フ	カ	シ	ツ
ラ	ッ	キ	ー
メ	コ	ン	ガ
ン	ト	ル	コ
コ	イ	ン	ウ

フ	ッ	ト
---	---	---

—— 理念 ——

患者そして家族と共にあゆむ医療

—— 基本方針 ——

安心安全な高度の医療
患者中心の医療
地域への貢献
医療人の育成
医学研究の推進



帝京大学医学部附属病院

〒173-8606 東京都板橋区加賀2-11-1

TEL.03-3964-1211 (代表)

<https://www.teikyo-hospital.jp/>